

## 複文における格要素の自然な省略について

伊藤 俊一

情報教育講座

### Appropriate Ellipsis of Case in Japanese Complex Sentences

Toshikazu ITO

Department of Information Sciences, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### 1. はじめに

日本語文においては、文脈情報等を用いて復元することが可能な格の値が省略されることは珍しいことではない。それらの省略された格の値を復元するための方略を論じた研究も多い ([1] [2] [3] [4] 等)。

しかし、復元可能な格の値をすべて省略することが適切な日本語文を産出するための最良の方法であるとは必ずしも言えない。

本研究では、省略しても復元可能な格を対象とし、それらの中で、どの種類の格が文中でどのような現れ方をしたときに省略することが適切であるのか、あるいは、省略しないことが適切であるのか、という問題について、実験データをもとに考察する。

#### 2. 方法

##### 【実験参加者】

大学生50名および社会人10名、計60名であった。

##### 【材料】

基本文：

一連の出来事を表現する2つの節からなる複文を作成する。

2つの節には、それぞれガ格・二格・ヲ格の3種類の格を義務格とする動詞を配置する。3種類の義務格を取る動詞を抽出するためのツールとして「京都大学格フレーム」を用いる。選ばれた動詞対は次の12対である。

- 勧めて、 - 売った。
- 見せて、 - 自慢した。
- 見せて、 - 譲った。
- 説明して、 - 任せた。
- 渡して、 - 読ませた。
- 出して、 - 解かせた。
- 送って、 - 保存させた。

- ねだって、 - 買わせた。
- 請求されて、 - 支払った。
- 聞かれて、 - 教えた。
- 連れて行って、 - 預けた。
- 持って行って、 - 売った。

これらの動詞対のガ格・二格・ヲ格のそれぞれに同じ値を割り当てることによって、

*AがBにCを-して、AはBにCを-した。*

という複文を作成する。

後節のガ格には、係助詞「は」を付加することとする。日本語の複文においては、ガ格の値が前節と後節で同じである場合に、通常、後節のガ格に係助詞「は」が付加される。逆に、後節のガ格に係助詞「は」が付加されないと、前節と後節の値が異なるものと推論される傾向が強いことが従来から指摘されている ([5] 参照)。

ガ格・二格・ヲ格に割り当てる値は、男性 (例：健太)・女性 (例：花子)・もの (例：花束)・場所 (例：教室) に分類される名詞の中から、分類が重複しないように割り当てることとする。これは、それぞれを代名詞化したときの表現が「彼」・「彼女」・「それ」・「そこ」というように異なるものにするための配慮である。以上の制約に基づいて作成した12種類の複文は、次の通りである。

太郎が花子に車を勧めて、太郎は花子に車を売った。  
健二が幸子に成績を見せて、健二は幸子に成績を自慢した。  
次郎が真由にパソコンを見せて、次郎は真由にパソコンを譲った。  
賢一が町子に仕事を説明して、賢一は町子に仕事を任せた。  
優人が直美に資料を渡して、優人は直美に資料を読ま

せた。  
 一郎が裕子に問題を出して、一郎は裕子に問題を解決させた。  
 和也が茜にデータを送って、和也は茜にデータを保存させた。  
 健太が由美にお菓子をねだって、健太は由美にお菓子を買わせた。  
 慎二が清美に旅費を請求されて、慎二は清美に旅費を支払った。  
 浩二が明里に電話番号を聞かれて、浩二は明里に電話番号を教えた。  
 徹郎が託児所に楓を連れて行って、徹郎は託児所に楓を預けた。  
 良太が古本屋に本を持って行って、良太は古本屋に本を売った。

さらに、これらの複文のそれぞれについて以下の操作を加えた6種類の文を作成し、それらを基本文とする。

- ・ 格の順序を入れ替える。
- ・ 後節の格の値をすべて代名詞化する。
- ・ 前節の第1格に係助詞「は」を付加する。  
 (第1格を明示的に主題として提示するための配慮である ([5] 参照)。

例)

太郎は花子に車を見せて、彼は彼女にそれを売った。  
 太郎は車を花子に見せて、彼はそれを彼女に売った。  
 花子には太郎が車を見せて、彼女に彼はそれを売った。  
 花子には車を太郎が見せて、彼女にそれを彼は売った。  
 車は太郎が花子に見せて、それを彼は彼女に売った。  
 車は花子に太郎が見せて、それを彼女に彼は売った。

**省略文：**

続いて、基本文から特定の格の値を省いた省略文を作成する。

格の値を復元することが可能な省略のみを対象とするために、前節で省略された格の値は、後節では代名詞ではなく必ず具体的な名詞によって指示することとする。

また、第1格を明示的に主題として提示するため、前節の第1格は常に省略の対象からは除外する。

以上の制約に基づいて作成した省略文のパターンは、それぞれの基本文に対して次の17通りとなる。

例)

太郎は花子に車を見せて、彼は彼女に売った。

太郎は花子に車を見せて、彼はそれを売った。  
 太郎は花子に車を見せて、彼は売った。  
 太郎は花子に車を見せて、彼女にそれを売った。  
 太郎は花子に車を見せて、彼女に売った。  
 太郎は花子に車を見せて、それを売った。  
 太郎は花子に車を見せて、売った。  
 太郎は花子に見せて、彼は彼女に車を売った。  
 太郎は花子に見せて、彼は車を売った。  
 太郎は花子に見せて、彼女に車を売った。  
 太郎は花子に見せて、車を売った。  
 太郎は車を見せて、彼は花子にそれを売った。  
 太郎は車を見せて、彼は花子に売った。  
 太郎は車を見せて、花子にそれを売った。  
 太郎は車を見せて、花子に売った。  
 太郎は見せて、彼は花子に車を売った。  
 太郎は見せて、花子に車を売った。

### 【手続き】

基本文と比べてそれに対応する省略文がどの程度自然な文であるかを評定するための問題冊子12ページ分(基本文12種類分)が各実験参加者に配布される。

問題冊子の各ページは、基本文1文とそれに対応する省略文17文が印刷されている。

実験参加者は、それぞれの省略文を、

5：基本文と比べて、とても自然である

4：基本文と比べて、やや自然である

3：基本文と同程度の自然さである

2：基本文と比べて、やや不自然である

1：基本文と比べて、とても不自然である

の5段階で評定する。

基本文と省略文における格(ガ格・ニ格・ヲ格)の順序、基本文の提示順序、および、それぞれの基本文に対する省略文の提示順序は、実験参加者間でカウンターバランスされた。

## 3. 結果

### 【第1格の分析】

Fig. 1に第1格の自然さ評定値(格の種類×格の省略方法)を示す。

格の種類(ガ格・ニ格・ヲ格)と格の省略方法(後節省略・省略なし)の2要因による自然さ評定値の分散分析の結果、交互作用が有意であった( $F(2, 1218) = 60.84, p < .01$ )。

格の種類の単純主効果は、「後節省略」・「省略なし」の両方において有意であった。また、格の省略方法の単純主効果は、ガ格・ニ格において有意であった。

LSD法による多重比較( $MSe = 1.3788, 5\%$ 水準)の結果、「後節省略」では、ガ格の評定値が他の格よりも有意に高かった(ガ格 > ニ格 = ヲ格)。「省略なし」で

は、ヲ格の評定値が他の格よりも有意に高かった（ヲ格>ガ格=二格）。

ガ格・ニ格では、「後節省略」の評定値が「省略なし」よりも有意に高かった。ヲ格では、「後節省略」と「省略なし」の評定値間で有意差は認められなかった。

**【第2格の分析】**

Fig. 2に第2格の自然さ評定値（格の種類×格の省略方法）を示す。

格の種類（ガ格・ニ格・ヲ格）と格の省略方法（前節省略・後節省略・省略なし）の2要因による自然さ評定値の分散分析の結果、交互作用が有意であった（ $F(4, 1215) = 38.83, p < .01$ ）。

格の種類の単純主効果は、「前節省略」・「後節省略」・「省略なし」の全ての水準において有意であった。また、格の省略方法の単純主効果は、ガ格・ニ格・ヲ格の全ての水準において有意であった。

LSD法による多重比較（ $MSe=1.3066, 5\%$ 水準）の結果、「前節省略」では、二格の評定値が他の格よりも有意に高かった（二格>ガ格=ヲ格）。「後節省略」では、ガ格の評定値が他の格よりも有意に高かった（ガ格>ニ格=ヲ格）。「省略なし」では、ヲ格の評定値が二格よりも有意に高く、二格の評定値がガ格よりも優位に高かった（ヲ格>ニ格>ガ格）。

また、LSD法による多重比較（ $MSe=1.3066, 5\%$ 水準）の結果、ガ格では、「後節省略」の評定値が「省略なし」よりも有意に高く、「省略なし」の評定値が「前節省略」よりも有意に高かった（後節省略>省略なし>前節省略）。二格では、「後節省略」と「省略なし」の評定値が「前節省略」よりも有意に高かった（後節省略=省略なし>前節省略）。ヲ格では、「省略なし」の評定値が「後節省略」よりも有意に高く、「後節省略」の評定値が「前節省略」よりも有意に高かった（省略なし>後節省略>前節省略）。

**【第3格の分析】**

Fig. 3に第3格の自然さ評定値（格の種類×格の省略方法）を示す。

格の種類（ガ格・ニ格・ヲ格）と格の省略方法（前節省略・後節省略・省略なし）の2要因による自然さ評定値の分散分析の結果、交互作用が有意であった（ $F(4, 1215) = 60.74, p < .01$ ）。

格の種類の単純主効果は「前節省略」・「後節省略」・「省略なし」の全ての水準において有意であった。また、格の省略方法の単純主効果は、ガ格・ニ格・ヲ格の全ての水準において有意であった。

LSD法による多重比較（ $MSe=1.2969, 5\%$ 水準）の結果、「前節省略」では、二格の評定値がガ格よりも有意に高く、ガ格の評定値がヲ格よりも有意に高かった（二格>ガ格>ヲ格）。「後節省略」では、ヲ格の評定値が他の格よりも有意に高かった（ヲ格>ガ格=ニ格）。「省略なし」では、ヲ格の評定値が二格よりも有

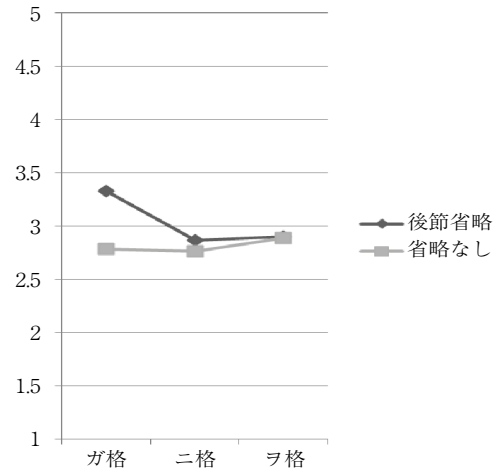


Fig. 1 第1格の自然さ評定値（格の種類×格の省略方法）

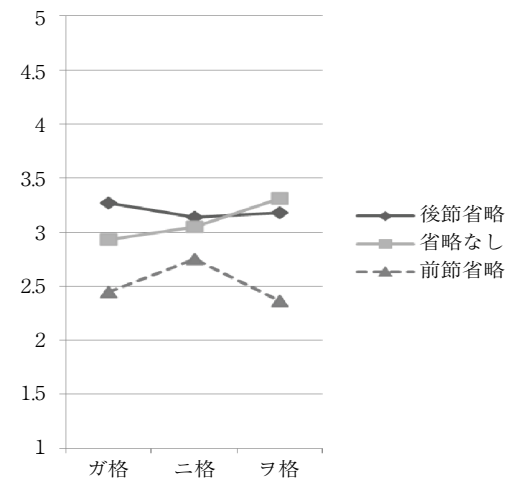


Fig. 2 第2格の自然さ評定値（格の種類×格の省略方法）

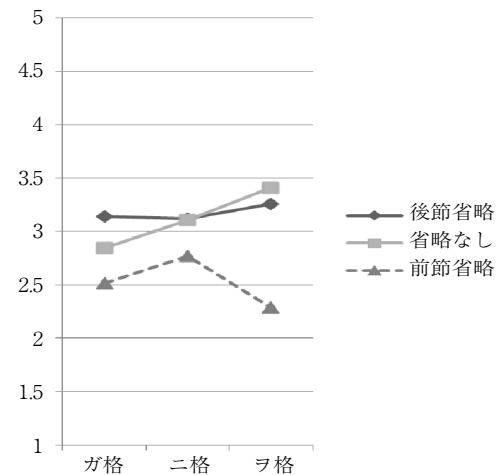


Fig. 3 第3格の自然さ評定値（格の種類×格の省略方法）

意に高く、二格の評定値がガ格よりも有意に高かった（ヲ格>ニ格>ガ格）。

また、LSD法による多重比較（ $MSe=1.2969, 5\%$ 水準）の結果、ガ格では、「後節省略」の評定値が「省略なし」よりも有意に高く、「省略なし」の評定値が「前

節省略」よりも有意に高かった(後節省略>省略なし>前節省略)。二格では、「後節省略」と「省略なし」の評定値が「前節省略」よりも有意に高かった(後節省略=省略なし>前節省略)。ヲ格では、「省略なし」の評定値が「後節省略」よりも有意に高く、「後節省略」の評定値が「前節省略」よりも有意に高かった(省略なし>後節省略>前節省略)。

#### 4. 考察

##### 【後節における省略と代名詞化】

格の種類ごとに、後節における「省略」と「省略なし」(=代名詞による指示)の自然さ評定値を比較してみる。

ガ格は、その文中での位置(第1格・第2格・第3格)に関わらず、後節では代名詞によって指示することよりも省略することが自然であると評定された。

二格は、その文中での位置によって異なる結果が得られた。二格が第1格に置かれた場合には、後節において省略することのほうが代名詞によって指示することよりも自然であると評定された。一方で、二格が第2格と第3格に置かれた場合には、省略することと代名詞によって指示することの自然さ評定値に差は認められなかった。第1格を「主題」、第2格と第3格を「焦点」として捉えるなら([6]参照)、二格は、焦点化されている場合には省略と代名詞による指示のいずれも同程度に許容されるが、主題化されることによって省略することの自然さが増大するということができる。

ヲ格も、また文中での位置によって異なる結果が得られた。ヲ格が第1格に置かれた場合には、後節において省略することと代名詞によって指示することの自然さ評定値に差は認められなかった。一方で、ヲ格が第2格と第3格に置かれた場合には、代名詞によって指示することのほうが自然であると評定された。ふたたび第1格を「主題」、第2格と第3格を「焦点」として捉えるなら([6]参照)、ヲ格は、主題化されている場合には省略と代名詞による指示のいずれも同程度に許容されるが、焦点化されることによって代名詞によって指示することの自然さが増大するということができる。

これらの結果をまとめてみると、後節においては、主題化された格はより省略されやすくなり、焦点化された格はより代名詞化されやすくなるという傾向を読み取ることができる。このことは、主題化された格よりも焦点化された格の方が、より明示的に表現されると言い換えることもできるであろう。

また、格の種類(ガ格・二格・ヲ格)による省略されやすさ、あるいは、代名詞化されやすさを見てみると、省略されやすい順にガ格・二格・ヲ格と並ぶことがわかる。ガ格は、主題化されていても焦点化されて

いても、常に省略されやすい。二格は、主題化されることによって初めて省略されやすさが代名詞化されやすさを凌ぐ。焦点化されている場合には代名詞化されやすいヲ格は、主題化されることによって省略されやすさが増大し、その結果、代名詞化されやすさとの差が消滅すると考えることができる。

このような格の種類による省略されやすさ、あるいは、代名詞化されやすさの違いは、それぞれの格が担っている意味的な役割に起因すると考えられる。

ガ格は、明示的な手がかり(係助詞「は」等)がなくても、他の格に比べて主題化されやすいと言われている([7]参照)。そのため、他の格よりも後節で省略されやすい傾向が強かったと考えられる。

逆に、最も省略されにくかった(すなわち、代名詞化されやすかった)のがヲ格であり、二格は省略されやすさ、代名詞化されやすさが、ガ格とヲ格の中間的な立場にあるという結果が得られた。森山[8]は、「一般に、運動の直接対象が運動と特殊に密接に結びついているものであること、運動のあり方を強く規制するものであること、運動の結果を一番深くこうむるものであることなどの理由で、それを表わすヲ格は、動詞と強く結びついて表れたりする。」と述べている。さらに、「主格を中心として見ると、ヲ格で表わされたモノ(さらに場所)はすでに主格が発する動力の影響下に置いて、具体的に動詞が示す働きかけを及ぼす対象として存在している。これに対し、二格で表わされた人(さらにはモノ、場所)は、主格が発する動力の影響下に置いておらず、これから動詞が示す働きかけを及ぼしていこうとする対象として独立して存在している。」と述べている。すなわち、ヲ格は二格と比べて動詞との結びつきが強く、出来事を文によって表現する際に、二格よりも重要な役割を担っているということができる。これらのことから、ヲ格は、焦点化されている場合には、省略を避け、代名詞によって明示的に指示することがより自然であったと考えられる。出来事の表現においてヲ格ほど重要な役割を担ってはいない二格では、たとえ焦点化されていても、省略されることと代名詞によって指示されることの間に差は生じなかったのであろう。

##### 【前節における省略】

いずれの格(ガ格・二格・ヲ格)においても、前節での省略は自然なものとは見なされていないことがわかった。このことは、日本語文において、一般的には、後方照応よりも前方照応が用いられることから推察されたことである。

#### 5. まとめ

本研究では、格の種類、および、それが主題化されているか焦点化されているかによって、その省略され

やすさに違いが生じることがわかった。

ただし、本研究では、格の順序が前節と後節で変化しない文のみを対象としたため、例えば、前節と後節で主題がシフトするような文については分析することができなかった。日本語の複文においてはしばしば認められるそのような文についての分析が今後の課題である。

### 参考文献

- [1] 村田真樹・長尾真（1996）名詞の指示性を利用した日本語文章における名詞の指示対象の推定 自然言語処理, 3 (1), 67-81.
- [2] 村田真樹・長尾真（1997）用例や表層表現を用いた日本語文章中の指示詞・代名詞・ゼロ代名詞の指示対象の推定 自然言語処理, 4 (1), 87-110.
- [3] 中川裕志・森辰則（1995）日本語マニュアル文におけるテイル, テアル, テオク, テミル, テシマウの語用論 自然言語処理, 2 (4), 19-35.
- [4] 中岩浩巳・池原悟（1996）語用論的・意味論的制約を用いた日本語ゼロ代名詞の文内照応解析 自然言語処理, 3 (4), 49-66.
- [5] 横川博一（1999）日本語の照応関係理解に関する一考察—『主題』(Topic) が果たす役割を中心に— 自然言語処理, 6 (4), 3-22.
- [6] 庭三郎 現代日本語文法概説  
(<http://www.geocities.jp/niwasaburoo/index.html>)
- [7] 野田尚史（1996）「は」と「が」（新日本語文法選書1）くろしお出版
- [8] 森山新 認知的観点から見たヲ格と二格の意味・用法の違い  
(<http://thkim.net/ko/data/mori2000.htm>)

(2012年9月18日受理)